

V 質問調査の結果詳細

～学力調査とのクロス集計・経年比較～

1 授業に関すること

(1) 「授業の理解」×「小学校第5学年当時（令和4～7年度）との比較」

調査結果のポイント

児童生徒質問調査の同一集団による経年比較について

【授業の理解】

質問項目「学校の授業はよく分かりますか。」（図31）

- 小学校第5学年当時と、現在の中学校第1学年・第2学年を比較すると、すべての学年において、「よく分かる」と回答した割合が下がり、「分からない」と回答した割合は年々上がっています。特に、理科について、中学第1学年・第2学年の「よく分かる」と解答した割合は、小学校第5学年当時と比べて約20%以上減少しています。
- 学習内容のつまずきが積み重なったり、進級・進学によって授業の進め方や学習の仕方が変わり戸惑いが生まれやすかったりすることなど、複数の原因が関係していると考えられます。

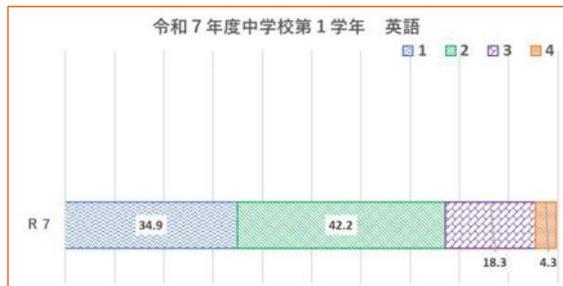
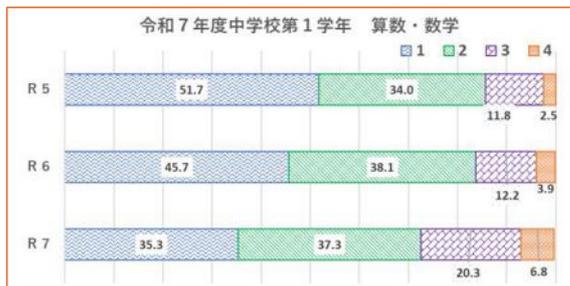
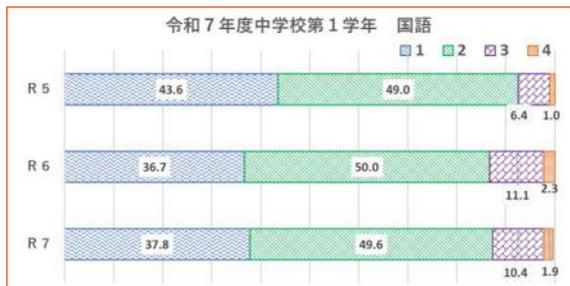
【図31】 同一集団（現中学校第1学年・第2学年）の教科に対する意識の推移

※ 令和5・6年度小学校第6学年の結果は、全国学力・学習状況調査より

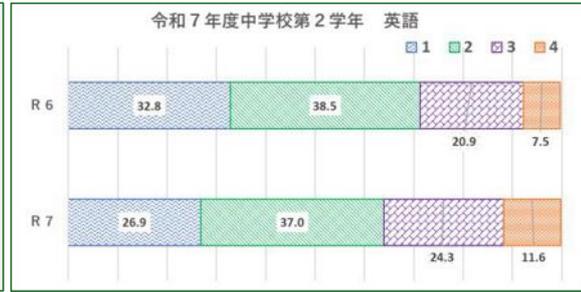
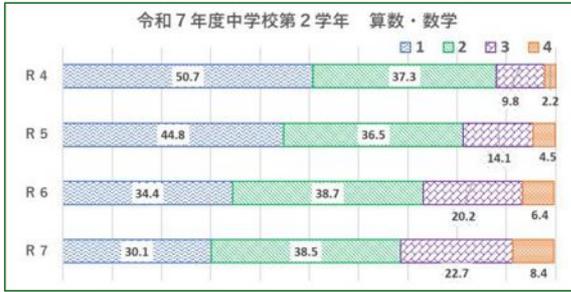
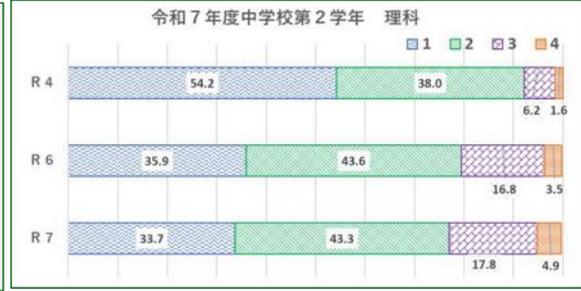
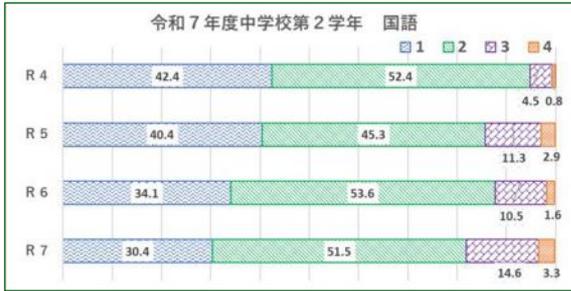
※ 令和7年度中学校第2学年英語については、令和6年度中学第1学年との比較

※ グラフの見方 1 よく分かる 2 どちらかといえば分かる 3 あまり分からない 4 分からない

令和7年度 中学校第1学年	R5 → R7			
	国語	社会	算数 数学	理科
1 よく分かる	-5.8	-13.4	-16.4	-22.3
2 どちらかといえば 分かる	0.7	2.0	3.3	8.0
3 あまり 分からない	4.1	8.4	8.5	11.1
4 分からない	0.8	2.7	4.3	2.9



令和7年度 中学校第2学年	R4 → R7 ※R6 → R7(英語)				
	国語	社会	算数 数学	理科	英語
1 よく分かる	-12.0	-8.7	-20.6	-20.5	-5.9
2 どちらかといえば 分かる	-0.9	-1.3	1.2	5.3	-1.5
3 あまり 分からない	10.1	7.4	12.9	11.6	3.4
4 分からない	2.5	2.4	6.2	3.3	4.1



【参考】令和7年度 小学校第5学年	国語	社会	算数	理科
1 よく分かる	50.7	52.3	51.8	60.8
2 どちらかといえば 分かる	41.5	36.6	31.9	31.2
3 あまり 分からない	6.7	9.5	12.5	6.2
4 分からない	1.0	1.3	3.5	1.5



Memo

(2) 「主体的・対話的で深い学び」×「教科正答率」

調査結果のポイント

教科正答率（小学校は4教科合計，中学校は5教科合計）と児童生徒質問調査のクロス集計について

【主体的な学び】

質問項目「課題の解決に向けて，自分で考え，自分から取り組んでいますか。」（図 32）

【対話的な学び】

質問項目「友達や周りの人の考えを大切に，協力しながら課題の解決に取り組んでいますか。」（図 33）

【深い学び】

質問項目「次の学習や実生活に結び付けて考えたり，生かしたりすることができていますか。」（図 34）

- どの質問項目についても，「当てはまる」と回答した児童生徒の正答率は最も高く，どの学年も肯定的に捉えている児童生徒ほど正答率が高い傾向となっています。
- どの質問項目についても，肯定的回答1と否定的回答4の間で，正答率に差が見られ，学年が上がるにつれて，差が大きくなる傾向となっています。特に，【主体的な学び】については，約13～20%の差が見られます。
- 【主体的な学び】，【対話的な学び】，【深い学び】についての意識の高さは，学習成果に一定の影響を与えていることが示唆されます。

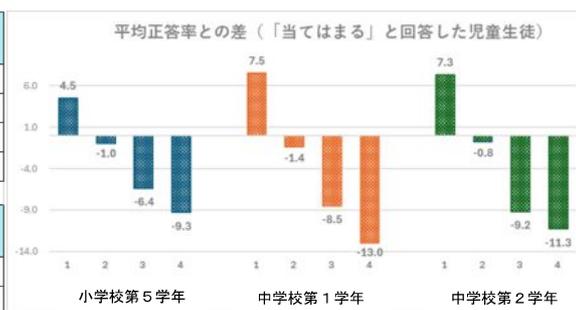
【図 32】 「主体的な学び」と「教科正答率」のクロス集計

【主体的な学び】

No.	小学校第5学年	割合(%)	正答率(%)	平均正答率との差
1	当てはまる	33.6	57.5	4.5
2	どちらかといえば当てはまる	53.9	52.0	-1.0
3	どちらかといえば当てはまらない	10.9	46.6	-6.4
4	当てはまらない	1.4	43.7	-9.3

No.	中学校第1学年	割合(%)	正答率(%)	平均正答率との差
1	当てはまる	30.1	61.1	7.5
2	どちらかといえば当てはまる	54.3	52.3	-1.4
3	どちらかといえば当てはまらない	14.1	45.1	-8.5
4	当てはまらない	1.4	40.7	-13.0

No.	中学校第2学年	割合(%)	正答率(%)	平均正答率との差
1	当てはまる	30.1	55.7	7.3
2	どちらかといえば当てはまる	53.1	47.6	-0.8
3	どちらかといえば当てはまらない	14.7	39.2	-9.2
4	当てはまらない	2.1	37.1	-11.3



- 1 当てはまる
- 2 どちらかといえば当てはまる
- 3 どちらかといえば当てはまらない
- 4 当てはまらない

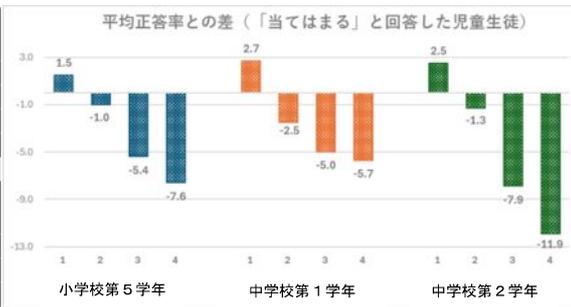
【図 33】 「対話的な学び」と「教科正答率」のクロス集計

【対話的な学び】

No.	小学校第5学年	割合(%)	正答率(%)	平均正答率との差
1	当てはまる	55.5	54.5	1.5
2	どちらかといえば当てはまる	39.2	52.0	-1.0
3	どちらかといえば当てはまらない	4.3	47.5	-5.4
4	当てはまらない	0.8	45.3	-7.6

No.	中学校第1学年	割合(%)	正答率(%)	平均正答率との差
1	当てはまる	52.3	56.4	2.7
2	どちらかといえば当てはまる	41.9	51.2	-2.5
3	どちらかといえば当てはまらない	4.8	48.6	-5.0
4	当てはまらない	0.7	47.9	-5.7

No.	中学校第2学年	割合(%)	正答率(%)	平均正答率との差
1	当てはまる	52.7	50.9	2.5
2	どちらかといえば当てはまる	41.2	47.1	-1.3
3	どちらかといえば当てはまらない	4.9	40.6	-7.9
4	当てはまらない	1.1	36.5	-11.9



- 1 当てはまる
- 2 どちらかといえば当てはまる
- 3 どちらかといえば当てはまらない
- 4 当てはまらない

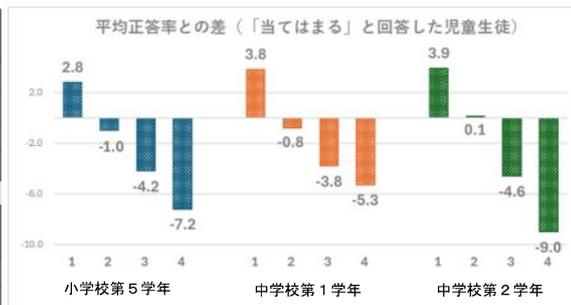
【図 34】 「深い学び」と「教科正答率」のクロス集計

【深い学び】

No.	小学校第5学年	割合(%)	正答率(%)	平均正答率との差
1	当てはまる	41.8	55.8	2.8
2	どちらかといえば当てはまる	45.9	52.0	-1.0
3	どちらかといえば当てはまらない	10.6	48.8	-4.2
4	当てはまらない	1.6	45.8	-7.2

No.	中学校第1学年	割合(%)	正答率(%)	平均正答率との差
1	当てはまる	32.6	57.4	3.8
2	どちらかといえば当てはまる	49.7	52.8	-0.8
3	どちらかといえば当てはまらない	15.5	49.8	-3.8
4	当てはまらない	2.1	48.3	-5.3

No.	中学校第2学年	割合(%)	正答率(%)	平均正答率との差
1	当てはまる	31.5	52.3	3.9
2	どちらかといえば当てはまる	49.2	48.5	0.1
3	どちらかといえば当てはまらない	16.9	43.8	-4.6
4	当てはまらない	2.3	39.4	-9.0



- 1 当てはまる
- 2 どちらかといえば当てはまる
- 3 どちらかといえば当てはまらない
- 4 当てはまらない

Memo

(3) 「個別最適な学び、協働的な学び」×「教科正答率」

調査結果のポイント

教科正答率（小学校は4教科合計，中学校は5教科合計）と児童生徒質問調査のクロス集計について

【個別最適な学び①】

質問項目「自分にあった教え方,教材,学習時間になっていたと思いますか。」(図 35)

【個別最適な学び②】

質問項目「自分で学ぶ内容を決め,計画を立てて学ぶ場面があったと思いますか。」(図 36)

【協働的な学び】

質問項目「話し合う活動で,自分の考えを深めたり,新たな考え方に気付いたりすることができていますか。」(図 37)

- どの質問項目についても、「当てはまる」と回答した児童生徒の正答率は最も高く,どの学年も肯定的に捉えている児童生徒ほど正答率が高い傾向となっています。肯定的に実感している児童生徒ほど,学習内容の理解が相対的に定着している可能性が考えられます。
- どの質問項目についても,「どちらかと言えば当てはまる」「どちらかと言えば当てはまらない」「当てはまらない」と回答した児童生徒の正答率は,平均正答率を下回っており,概ね,肯定的に捉えていない児童生徒は正答率が低くなる傾向が見られます。
- 【個別最適な学び②】について,「当てはまる」「当てはまらない」と回答した生徒の平均正答率を比べてみると,ほとんどの学年で9%以上の開きが見られます。これは,【個別最適な学び①】とほぼ同様の結果となっています。他の項目と比べて自己調整力を強く要するため,児童生徒の発達段階や経験の差が結果に表れやすい項目であると考えられます。

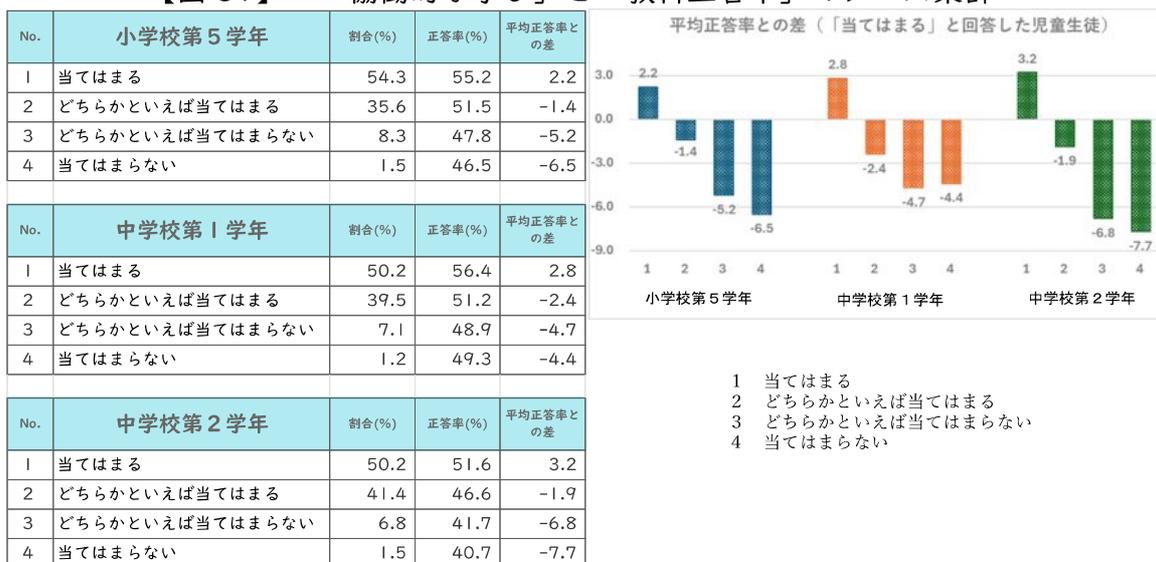
【図 35】 「個別最適な学び①」と「教科正答率」のクロス集計



【図 36】 「個別最適な学び②」と「教科正答率」のクロス集計



【図 37】 「協働的な学び」と「教科正答率」のクロス集計



Memo

(4) 「やりがいを感じる授業」 × 「教科正答率」

調査結果のポイント

教科正答率（小学校は4教科合計，中学校は5教科合計）と児童生徒質問調査のクロス集計について

質問項目「次の授業で学んでいてどのように感じますか。」

【授業①：先生の説明の時間が多い授業】

【授業②：自分たちで考えたり，話し合ったりする授業】

【授業③：自分たちが発表したり，友達の発表を聞いたりすることが多い授業】

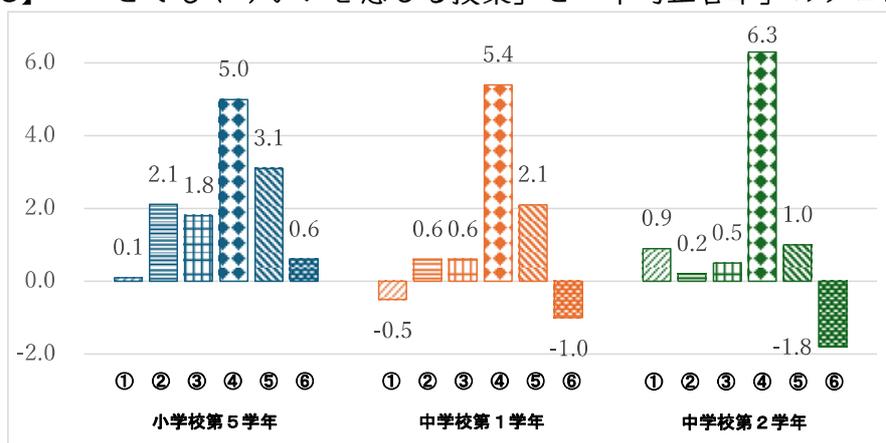
【授業④：難しい課題に挑戦する授業】

【授業⑤：自分たちで調べて，課題を解決する授業】

【授業⑥：タブレットやパソコン，電子黒板等を活用した授業】

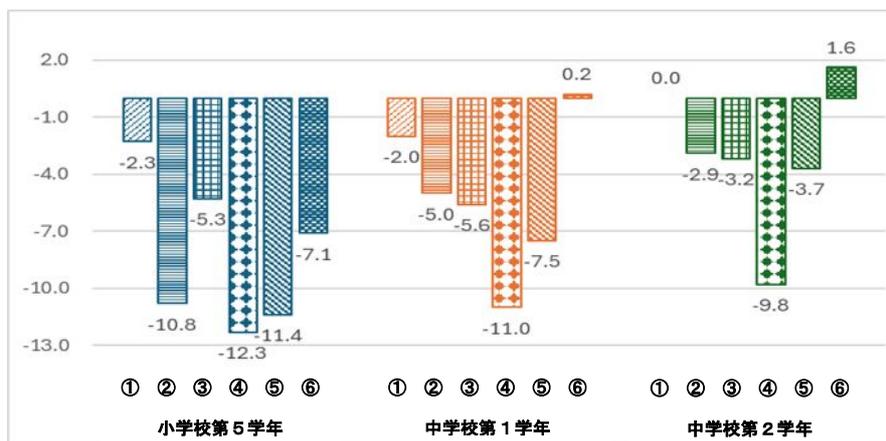
- 【とてもやりがいを感じる授業】（図 38）について
 - ・ どの学年も，授業④について，最も平均正答率が高い結果となっています。認知的に負荷の高い学習活動（難しいが，考えれば乗り越えられる課題）が，教科の学力と強く結び付いていることが考えられます。
 - ・ 小学校第5学年については，授業①～⑥の全てについて，「とてもやりがいを感じる」児童生徒は，正答率が平均を上回っています。このことから，授業形態にかかわらず，「やりがい」が学力と結び付きやすいと考えられます。特に，平均正答率が高い授業④・⑤・②は，「主体的・対話的で深い学び」に直結する授業形態であると言えます。また，授業①・⑥については，教師の説明やICT活用が学習理解や学習活動への挑戦を支える役割として機能していると考えられます。
 - ・ 中学校第1学年・第2学年については，平均正答率が一部マイナスであることから，やりがい感があっても，学習内容の定着や活用に至っていない場合があることが分かります。
 - ・ 中学校第1学年については，授業④・⑤（課題解決型・探究型）の授業は，正答率は高いことが分かります。また，第2学年については，授業①（説明中心）も高いことから，学習内容の難度・抽象度が高まるなかで，体系的な説明を学習の支えとして必要としている実態を示している可能性があります。
 - ・ 中学1・2年については，授業⑥（ICTの活用の授業）は，正答率が平均を下回る結果となっています。情報量が多い中で，操作が中心となり思考の整理が後回しになり，「使っているが理解に収束していない」と考えられます。ICT活用や教師の説明中心の授業で，「見る・聞く」だけで終わると学力向上につながりにくく，生徒の「思考・判断・表現」と結び付ける授業設計が不可欠であると言えます。

【図 38】 「とてもやりがいを感じる授業」と「平均正答率」のクロス集計



- 【やりがいを感じない授業】(図 39) について
- ・ どの学年も、授業④について、最も平均正答率が低い結果となっています。先ほどの「とてもやりがいを感じる」(図 37)の結果からも分かるように、顕著な二極化が見られます。また、授業⑤についても、二極化が見られます。課題の難度や学習の進め方を複数設定したり、途中段階での振り返りを意図的に位置付けたりする必要があると考えられます。
 - ・ 小学校第5学年については、授業①～⑥の全てについて、「やりがいを感じない」児童生徒は、正答率が平均を下回っています。特に、「主体的・対話的で深い学び」に直結する授業形態④・⑤・②の平均正答率が低い群の児童生徒は、学習過程への参加や意味付けが十分でない可能性があります。また、授業①・⑥についても低い児童生徒は、学習への関与そのものが弱いと考えられます。
 - ・ 中学校第1学年・第2学年については、授業④・⑤(課題解決型・探究型)の授業は、正答率は低いことが分かります。課題の難度や学習方法に適應できず、学習成果につながっていない状況がうかがえます。
 - ・ 授業⑥(ICTの活用の授業)について、中学校第1学年・第2学年では、正答率が平均を上回る結果となりました。やりがいを感じにくい生徒にとって、ICTが理解を下支えする役割を果たしていることが考えられます。小学第5学年では、同様の効果が見られないことから、学習内容の難度や自己調整力の発達段階によって左右される可能性が高いと考えられます。
 - ・ 「やりがいを感じない」ことと、「学力が低い」ことは、単純に同一ではないと考えられます。課題の提示方法や個別支援の在り方、成功体験の設定などが不十分な場合、本来の能力を発揮できるはずの児童生徒も学習から離脱してしまう可能性があると言えます。

【図 39】 「やりがいを感じない授業」と「平均正答率」のクロス集計



Memo